

近い将来 世界をリードする 日本の文明文化の 拡がりとお行き②



(株) 人間と科学の研究所 所長

飛岡 健

(前号から続く)

(1) 最大の克服ポイント
はグローバリズム
とグローバルこそ、これから
の時代のキーワード)

さて今までの考察の中で、グロー
バリズムが大きな問題であると語っ
てきたが、1700年代の後半から、
この地球社会は、第2次産業革命(動
力革命)により、諸々の分

野で、加速度的変化をい
ちだんと強めた。社会の変
化は、図2に示したように、
指数関数的に変化をしてい
るが、その変化は勾配が45°
を越えた地点から鋭く立ち
上がっていく。その地点に
当たるのが、第2次産業革
命期なのである。具体的に
図3から図5で地球社会で
の多くの事態が、指数関数
的变化をしている事を示し
ておく。

まさに第2次産業革命期
までは、地球上の殆どの地
域は、百年一日の変化をし

ていたが、第2次産業革命期は、ま
さに変化不在の地球社会の終わり
と、新しい変化の常在の工業化社会
の始まりとなった。それまでは地球
上の人々は、時代変化をそれ程肌で
強く感じる事は無かった。その変化
の様子を知るには、理性の力が必要
となり、その力の中で、概念的に自
分の一生を超える時間の時代変化を
把握するしかなかった。結果として、
僅かの人々のみに変化の様子は捉え

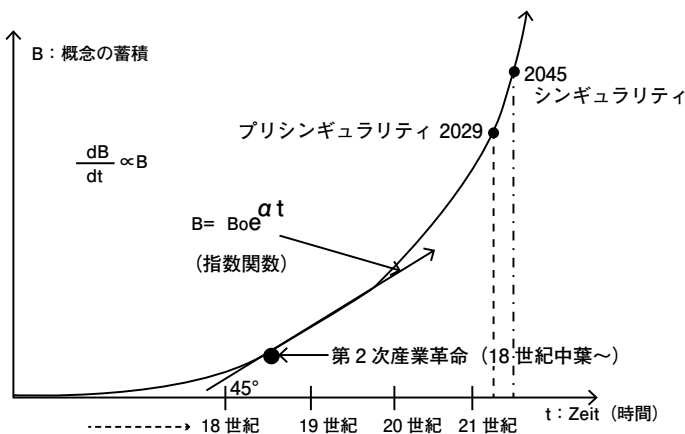


図2 指数関数的

近い将来世界をリードする 日本の文明文化の拡がりとお行き

られるのみであった。
明らかに第2次産業革命の生じた1970年代後半からは、十年一日、三年一日と時代変化は指数関数的に短くなり、最近では日進月歩なり、一部の技術等は、分進秒歩まで、その開発スピードを上昇させている。何とも地球上の人々は、忙しい変化の中で生きなければいけなくなってきた。(図6)

そして、ついしばらく前までは「科学技術文明の進歩は、人類に幸せをもたらす」と人類は単純に考えていたが、今日に至ってみると、そのメリットは物質的進歩という側面からは大きいのであるが、実は人類の生存の幸せという視点からは問題だらけである事に気付き始めた。何よりもひとりひとりが、その変化のスピードや圧力に付いて行き

にくくなり、時代変化との間に距離を感じ始め、ストレスを強く感じ始めている。それ故、もっと「スローライフ」をと考え始めるようになってきた。また富の生産と獲得が一部の人間に握られ易くなり、今日では貧富の懸隔は夥しいレベルになっている。僅か数10人位の人が、この地球上の富の大部分を所有し、多くの人類の

活動を支配しているのだ。ジョージ・ソロス1人で、タイ等の金融世界を動かしてしまう力を持っているのである。それを可能にしたのは、第2次産業革命(動力革命)や第3次産業革命(情報革命)であり、更に今日の第4次産業革命(脱情報化社会)脳業革命 or 知働革命(堺屋太一

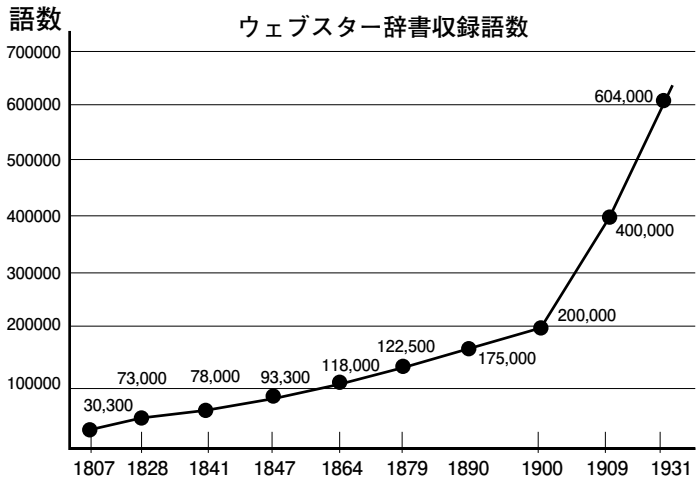


図3 ウェブスター辞書収録語数変化

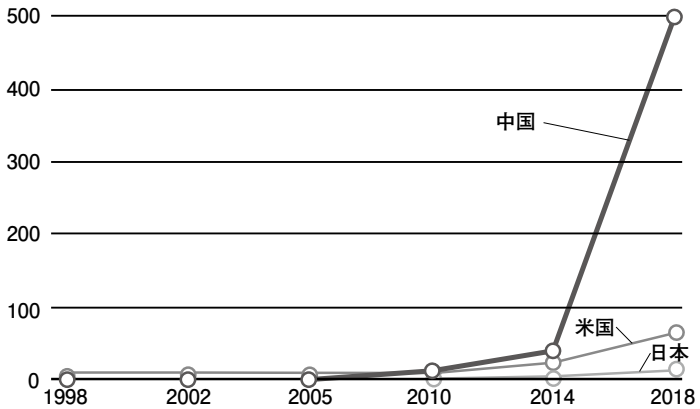


図4 中国のAI特許件数

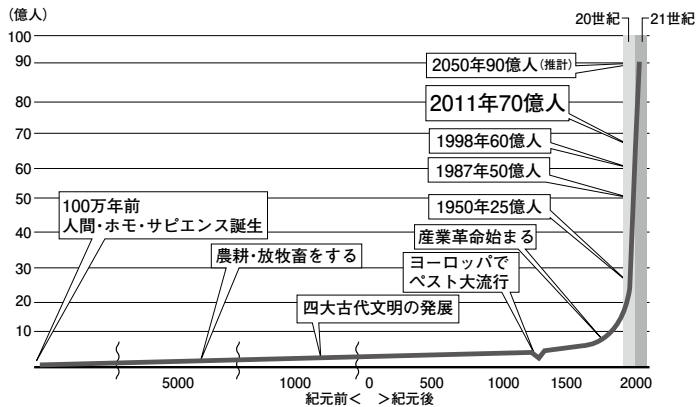
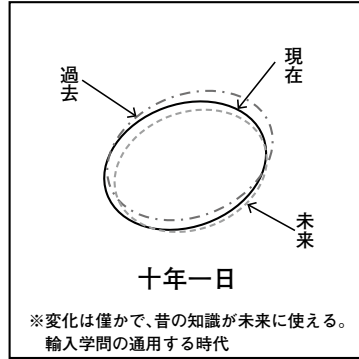


図5 世界の人口推移



〈変化の少ない時代〉



〈加速度的変化の時代〉

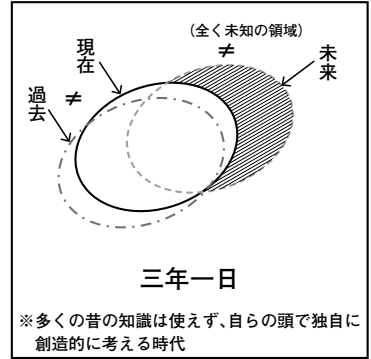


図6 十年一日から三年一日

それらの産業革命のもたらす恩恵を巧みに活用した人達が、桁ハズレの巨大な富を獲得し、人間社会に王の如く君臨している。それらの産業革命が各々、ロシア

のオリガルヒ（新興貴族）のような新興成金を各国に生み出してきた。それだけならまだしも、その富の生産の拡大の為に、地球上の各々の民族の生活の場としてのローカルな

地域（生態系）を巻き込み、従来の素朴で静かな生活を変えてしまっている。本来自然生態系と調和した活動の下に生産がなされるなら良かったのであるが、工学や化学をベースとする生産技術の多くは、地球生態系を壊す事によって、人工的、人為的な生産システムを構築するのが常であり、結果として生態系の限界を越えた破壊を行ってしまうことになっている。そして時代は進み、動力革命に次いで、情報革命、頭脳革命が生じ、それらの革命が生み出した機器、システム、ソフトウェア等を用いて生産、流通、消費活動等々は国境を越えて、よりグローバルに展開している。そうしたグローバル化によって、その活動は国境を越えて活発となり、CO₂をまき散らし、世界的に温暖化を招き、我々の生活の基盤であり、棲家である地球生態系を著しく破壊し、異常気象を招き、世界中に病原菌やウイルスを拡散させる状況を招いている。

今日の異常気象は誰の目にも、感覚的に明らかであるにも拘わらず、一部の人々は気象変動の一環であると強弁している。仮にそうであって

も、ある短い期間の変動によって地球が壊れてしまったら終わりである。

更に人類を何回も滅亡させる量の核兵器やBC兵器を一部の国々が所有し、それを「使用するぞ」と他の国々を脅す手段と化している。そして恐ろしい事に人類は地球社会の中で棲む為の絶対条件の倫理観を弱め、金権亡者と化し、地球社会の金融経済を巨大なバケモノにしまった。今日はそこでの支配者が実質的に世界を支配している。

それはまさに、人類の倫理、道徳、理性の弱まりでもあり、多くの地球の中の人々は物質生活の拡大を無我夢中で行う熱病にかかってしまっている。自分の行っている経済活動や政治活動が、この地球社会をどこに向かわせているかの自覚を失わせ（いや想像力を超えているかも知れない）、一部の人々の極めて危険な思想の下に引つ張られて、他の人々はあたかも奴隷のように生存活動を行うようになってしまっているのである。

より速く・より広く・より多く・より速く・より合理的な形

近い将来世界をリードする 日本の文明文化の拡がり と 興行き

り大きな市場への拡大に向かっていく努力が国境を越えて無制限に広がっている。これをグローバルバブルと呼ぶ。このグローバルバブルこそが、今日の地球上での諸々の問題の根本原因の1つである。あるいは諸悪の根源なのである。その為にはいまいちど、第2次産業革命以前のローカルな生活を新しい時代に沿って考え直す事である。

明らかに今日の環境問題は、公害問題と異なり、地域レベルで解決出来る問題ではなく、地球全体規模の活動で対応しなければ解決出来ない大問題にまでなってしまった。それ故、世界全体で解決の努力をしなければならぬ。これはインターナショナルの問題なのだ。

インターナショナルとは国境を持つ国々が、各々主体的に世界的関わりを持って努力する動きを指す。

今日の状況は、あきらかに上述のように、地球社会に大きな問題を生み落としたグローバルバブルを抑制し、多くはより小さい単位のローカルに目を向けねばならない。但し環境問題を始め、幾つかの大きな問題は、インターナショナルに解決を図

らねばならない。何故なら上述した如く、多くの地球規模の問題があるからである。そうした意味を含めて、これからはグローバルとローカルを一緒にした「グローバル」な考え方が不可欠になってきている。

しかし各々の国や世界のリーダー達は、何となく今日の世界の危うさを感じて、不安を抱えているものの、物質的経済活動の拡大を抑制する努力は、環境対応等を除いて、殆どしていない。殆どの国際会議での各国のリーダーの発言は、むしろ相変わらず強欲資本主義や、専制主義体制を強める方向に向かっている。何故であろうか？

自らの生存基盤そのものの地球生態系の健全性を失うかも知れないのに、相変わらずその方向に向かっている。なんと愚かな事であろう。まさに「パンドラの箱」は開かれてしまい、閉じる事が出来ず、バベルの塔の建築を続けていこうとしているのだ。人類とは、何と愚かな生き物であろうか？誰が造り出したのか？さてそれでは、グローバルバブルに對抗して、グローバルに生存を図る為の先例やお手本、あるいはその考

え方は、既に地球上の歴史の中にあったのか？それとも新しく考え出さねばならないのか？どちらであろうか？私は前者であり、世界各地に、そのモデルはある。特に日本と

いう国の歴史の中により可能性の高い事例を見出す事は可能と捉えている。確かに縄文時代まで戻れば、小さな集団で、この大自然の中の一員として、ひっそりと静かに生活をしてきた。それ故1万年以上も社会が続いた。そして弥生時代以降になると、全てが拡大し始める。より遠く・より広く・より速く・より沢山・より合理的。にという今のグローバルバブルと同じ考え方が始まる事になる。

しかし、まだスケールが異なり、地球の持っている自然の能力を人類の活動が超える事はなかった。だが前述の如く、第2次産業革命以降の人類の活動は、地球の諸々の生命を養う能力を破壊するまでに至ってしまった。しかもそこにはその破壊の原因であるグローバルバブルを考え直す考え方は備わっていないように見える。それでは地球社会の破滅を待つだけになってしまう。それならば、

ここで筆をおかねばならない。そして「ケセラセラ」、「なるようになるさー」とうそぶくだけになってしま

う。しかし私は少なくともグローバルバブルを止めるような考え方を失ってはいけないし、実際にこれからの時代に参考となる社会があったのだと考えるのである。上述のような縄文時代であり、江戸時代の日本社会の安定した姿である。江戸時代の鎖国政策のような考え方が日本社会の歴史にあったのだ。だから何らかの地球の未来の姿が見つけられる筈だ。

そもそもある一定の時期までは、人類はもともと小さい範囲の社会で、他との接触は殆ど無い生活をしてきた。それはそれで幸せであったのだ。しかし外の世界への関心が全く無かった訳ではない。特に日本は島国で四方を海に囲まれているので、沢山の漂流物が流れ着き、外の世界への関心は強かった。

実際に安土桃山時代まで沢山の文明文化をアジア大陸から入れ、それを日本化してきた。ところが江戸幕府になると、鎖国政策を敷いたのである。何故か？そこに明日の地球社

会の姿へのヒントがあるかも知れない。

江戸幕府が、1603年に始めて36年後の1639年にポルトガル船の来航を禁止したのが始まりであるが、それは貿易に伴って、キリスト教の布教が盛んになり、その教えが幕府の身分制度に反する為だったからのものである。また開国の要求が強まり、植民地化される可能性があり、それを排除する為であった。

現在生じているウクライナ戦争の当事者のロシアも、ある面でグローバリズムと自らのスラブ文明文化との折り合いをつける努力をする中での出来事と理解する人々がいる。既にグローバリズムの説明をしたが、それは世界を単一のシステムに変えようとする一神教的な支配を具現化するものであり、それを受け入れる事を拒否する行動の一環であると理解するのである。

(2) 何故グローバリズムが止まらないのか！

さて、グローバリズムをグローカリズムにする為に、「グローバリズ

ムが何故この地球上で止まらないか」の真因を探し出す作業が不可欠であるので次にそれを行っていきましょう。

2-1 人間の欲求の拡大志向と他者との比較心の強さ

第1に考えられるのは、人間ひとりひとりに内在している欲求（生理心理精神）であり、その一方向的拡大指向である。そして他者との比較と競争心の強さである。それらはひとりひとりが、自らを振り返ってみれば判ると思う。少しでも知識を増やしたい、収入を上げたい、便利なモノを手にした、もっと良い家に住みたい、もっと旅をしてみたい等々、より良いモノをとるという向上心という欲求を強く持っている。

この向上心や探求心が、想像力や創造力と相俟って、人類は絶えず文明文化を1万年以上の期間に渡って展開する努力を一方向的にしてきた。しかしそうした努力が1700年代後半の前の時代位までは、百年一日の如き変化の程度で、かつ人々の活動のレベルが自然の浄化能力を越えないローカルでの出来事の範囲に収

まっていた。そうした時までは良かったが、1700年代後半からの人類の活動がもたらす事態はそれほど単純ではなく、地球の有限さや限界が見えてきた。

そうした人類の一方向的な拡大要求は、何よりも人間に奥深く根差した「他者との比較」という本能的な考え方と行為である。この比較は明らかに人間が、悟性を宿し、「言葉記憶意識」の三位一体を持った瞬間から、即ちホモサピエンスとなった事からその体内に宿してしまったようである。少しでも他者より、良いモノを所持したい、良い生活をしたい、より楽しい生活がしたい、より豊かになりたい等々の「よりmore」という概念が誕生してしまった。良く言えば、進歩思想であるが、今我々に必要なのは、無限の進歩ではなく制約された進歩思想なのである。あるいは進歩ではなく成熟思想なのかも知れない。

それは前述の欲求拡大指向と表裏一体をなすものであり、人間が考える葦である「ホモサピエンス」である事が根本原因となっている訳である。動物や植物のような他の生命体

にも、種の保存という本質的な欲求が遺伝子の中にあり、より良い生存環境を求める為に、自らの能力をより高次に環境の淘汰圧に適應する為に「よりmore」の考えが本質的に宿されているのである。しかし、それは与えられた環境の中での話であり、エデンの園の中での話である。人間の話しはエデンの園から追放された種としての話しである。

こうした悟性による「欲求の拡大」と「より良い方向の比較選択」という人間の考え方と行為は、それらの原因が「言葉記憶意識」の三位一体にあるとするならば、それらをより高度に高めて「欲求と比較」という概念をより高度に昇華させていかなばならないし、人間から概念を奪わない限り、救いようがない。それしか方法は無いのであるか？今の時代は世界的に分別の無分別化が極限に達しようとしている。無分別の正しい意味は、分別が無いという俗的な悪しき状況と共に、分別を越えてより真理に近づくという意味もある。実はこの理解が重要なのである。将来的には医学が発達して、人間の欲求と比較という概念を消去し

近い将来世界をリードする 日本の文明文化の拡がりとお興行

てしまう薬や治療法が出来れば別であるが、今度は逆にそれ自体が新しい環境への適応力を失せ、人類滅亡の危機が訪れて来る事態を招くかも知れない。

それ故、毒を持つて毒を制する如く、言葉でもって言葉の生み出す「欲求と比較」とを抑制していく方法を案出しなくてはならない。しかし難しい。この地球は人間の増大する欲求と比較に対して無限の許容力を持つものではなく有限なのである。「地球はもう勘弁してくれ」と言っているのである。

2-2 地球が無限の大地で無くなってしまう

この地球の有限さを示す言葉が経済学にある。それはカウボーイ経済学と宇宙船経済学である。

カウボーイ経済とは、カウボーイが牛や馬や羊等を飼育する際に、自然の牧草地を求めて移動し、自然の生み出した植物を動物等の餌とし、自然の河川や泉を水源として、動物達の出した糞等が自然の浄化力により処理されている状態を指し、その範囲に人間の経済行動がある内、即ち自然の生産力や浄化力が人間の行動を許せる範囲にあるまでは、人間が自然を搾取しても大丈夫だった。その状況をカウボーイ経済学と称した。

ところがそれが許されなくなってしまう、全てを自然に委ねるのではなく、人工的に処理せざるを得なくなってきた。そこで宇宙船経済学という言葉が登場したのである。宇宙船の中では、資源が少ないのと諸々が限られた状況にあるので、自分で出した尿や糞や排気したガスを分解して、再利用する機能を内部に人工的に持っていないと、宇宙船内の生活が維持出来なくなってしまう。実際に宇宙船ステーション内では、そういう機能が取り込まれているのである。

明らかに今日の地球は、宇宙船地球号(Space Ship Earth)と呼ばれる状況で、宇宙船内での循環型システムと同じ経済体制にしないと、宇宙船地球号は成り立たなくなってきた。そうした状況の経済を宇宙船経済学と呼ぶ。明らかにこれからは宇宙船経済学の時代なのである。

(3) 人間の狂気性

この地球上の一部の人々は、どうも他の人間を傷つけたり、殺しても

余り悪い事と思わないようである。しかも「少なく殺すと殺人だが、圧倒的に沢山殺すと英雄だ」という矛盾した事実もある。戦争というお互いの国同志の殺人行動で沢山殺して、勝った側に英雄が生まれるのである。航空戦では、坂井三郎のように、5機以上撃ち落とすと「エース」という称号を貰った。今日に至っても、人類は戦争を止めないでいる。むしろ武装能力を高めるべく軍拡競争を強めているのだ。

そしてアフリカや中東、アジア等で生じている同じ国の中での異民族間の血で血を洗う戦闘、更には2022年のロシアのウクライナ侵略等、人類という種は、同じ種でありながら、人間である相手を殺しても、争い合う事を止められない種のようにである。そして目を街に移すと、日本の秋葉原での無差別殺人事件や、大阪でのクリニックの放火による集団殺

人、そしてアメリカでの夥しい数の銃の乱射事件や、ブラジルでの貧民街での殺人事件等々、世界中で日常的に殺人事件が生じている

考えて見ると、つい数百年前には、地球社会には「人喰い人種」がまだいたし、本当に食料が無くなると、人を食べるまでになってしまう。そうした狂気性を本能的に内包しているのが、人間のようである。第2次世界大戦の南方での日本軍の飢餓状態で戦友を食べた話しや、航空機が不時着した時(1972年のウルグアイ空軍機のアンデス山脈に墜落)の話しても、人が人を食べて、その生存を図るという行為を行っていたのである。

冷静に世界の歴史を見ると、ひとりひとりの生存への欲求は、時として他者を食いモノにしても生存を図ろうとする事が本能的に備わっていると考えざるを得ない。人間という生き物は自殺もするが、人殺しもするのが人類という種の遺伝子の中にある特質なのであるか?

従って、ヤクザやマフィア、あるいはテロリストという存在は、なかなか消滅する事は無いであろう。し

かこうした存在は、全体から見ると一部なので、人類としては全体としての生存に大きな影響を与えていないと今までは考えられた。しかし今日の科学技術の進歩はテロリストが、小型核兵器や生物兵器、化学兵器を持ちうる時代であり、彼らが狂気を示した時、人類にとっては恐怖である。ジェノサイドを僅かの人数で起こせるのだ。その点は用心深く考えていかねばならない。その中で何よりも現実的に問題なのは、戦争という大量殺人を生せしめる人間の行為である。

何故、この狂気が生じるのであるか？それは1個の生命として、自らの生命を守るといふ本能は、同じ種族に対しても働くと考えるのが合理的である。ましてや異なる民族は、より容易に自らを守る為に他の生命を奪うという行為を容認し易くする。

実は狂気というのも、人間が悟性を宿した事が一因であると共に、生命体全ての中にある本能的生存闘争の一環として表れるものと観察出来る。

我々の祖先とも言われる猿の世界

でも、異なる種類の猿を食する猿がいる。そして人間もまた今から200〜300年前までは、未開民族、あるいは人喰い人種が現存しているのである。

まさに人殺しという狂気性は、人類というか、生命体全ての中に内在する本能であり、理性的に論理的に考え、人為的に除去していく対象なのである。

しかし真の問題とせねばならぬ狂気は、人類そのものを滅してしまいかも知れない狂気なのだ。あるいは僅かの人数の人達や、一部の国のみが、地球を支配し、多くの人の人権

狂気の発動
= 平衡状態
> 狂気の抑制
<



図7 狂気—倫理観

を奪い奴隷化してしまう事を考え、実践してしまう狂気である。核戦争の引き金を引く狂気、人類の密集地にBC兵器を利用する狂気等は、ある意味で目に見える狂気と言える。ところが目に見えないもつと戦慄すべき狂気がある。

それは人類全体を洗脳してしまおうという狂気である。その1つは一神教である。確かに1つの宗教が真に地球上の人々を幸せにする内容を持つていれば、最終的に一神教も是なのであるが、そこに至るまでに、既に途中で多くの人と人との戦いを招いて多大な犠牲を招いてしまっている。

更にその一神教に人類を差別する内容が隠されていたら大変である。普通には考えにくい事であるが、多くの宗教教団での出来事を見て見ると、そこにもある種の狂気が隠されているように見える。カソリックの人身売買、児童虐待や、性的倒錯等その一例である。

どうも人類という生き物の中には本質的に、人を殺す事に抵抗を弱めてしまう狂気が潜んでいるように見える。そうでないと人類の闘争の歴史

史は解釈が出来ない。

画 (4) 一部の人々の地球支配計

前の節で述べた狂気の一部かも知れないが、この地球上の一部の人々が、自らの生存の場を確保する為に、地球全体をグローバル化し、その社会を政治、経済体制を始めとして、全てを自分達の為に支配していかうとの、ある種の選民思想の下に動いている事実が存在している。

今はどうか判らないが、1700年代後半に、第2次産業革命のうねりに巧みに乗って、著しく成長したフランクフルトで誕生したロスチャイルド一族はイルミナティという秘密結社を設立し、そこではユダヤ人がこの地球上で安心して生存している場としてのユダヤ帝国を建設し、それ以外をゴイム(奴隷)として扱う計画を練った。その当時は、危険視され、表面的には解体されたようであるが、その幹部はフリーメイソンに入り、そこで計画の実行の機会を狙っていたと言われている。そして、その動きは今日のディープ

近い将来世界をリードする 日本の文明文化の拡がりとお興行き

ステーツの動きとして続いており、世界支配の意図はかなり達成に近づいている。

あるいは歴史的にも、モンゴルやトルコ、そして今日のアメリカや中国もそうした計画を持ち、実践したし、今まさにしている。どうも人類の中には、そうした支配欲を持った人、民族、国が登場するようになっていくようだ。それが歴史の常なのである。

しかしこの地球上での人類の生存の為に、他の生物を含めて地球上で多様性を持つことが不可欠であり、多くの地域や国々が各々の特色を持つて生活している事が本質的に在るべきなのである。その事の妥当性は生態学が教えてくれる。豊かな生態系とは、多様な生物が複雑に入り組んだシステムを調和的に形成して出来ている。それにより様々に押し寄せて来る環境の淘汰圧に打ち勝って生存出来る多様性こそ種の存続のカギであり、原理なのである。ダーウィンは「強いモノが残るのではなく、残ったモノが強いのだ」という箴言を残しているが、まさに残ったモノはその内部に多様性を内

包している事が多いのである。

その意味でも、人類が地球に残るには、様々な民族や、国家の存在の多様性が必要なのである。まさに日本人の信じる「悉・皆・仏」の考え方であり、それでこそ曼荼羅の世界（諸神混在の中に、宇宙的大調和）があつて人類社会が存続し得るのである。

(5) 人間ひとりひとりは、生理と心理の重層構造体と地球も同じく、生理と心理と精神の重層構造体と

さて我々は、今日のグローバリズムやその中核にある金融経済や資本主義、そして民主主義といったイデオロギーや社会体制を根本的に考えていく事が十分に望まれているのであるが、その望みを実現する為に地球社会をどのように捉えたら、より良い解決策が得られるのだろうか？ 私は次のように考えた。

何よりも社会という組織は、ひとりひとりの人間が集まって出来ている。そこで、1人の人間の捉え方をベースとして社会を考える事が出来ないだろ

地球社会の生理	経済活動 衣、食、住、医、スポーツ、労働	各国の自然とそこでの人々の環境適応行動 様々な人種の特徴 様々な自然の特徴
地球社会の心理	民族間や国家間の好き嫌い 社会活動（おもてなし、接遇） 音楽、芸術、文化	人権問題 ハイトクレーム 人間主義—個人主義
地球社会の精神	社会イデオロギー 宗教 政治活動、思想活動	資本主義、共産主義、社会主義 自由民主主義、専制主義 唯物論、観念論

図8 地球社会の生理～心理～精神

うか？そもそもひとりひとりの人間が、その生存をより良く達成する為に形成されたというのが社会という組織である。ならば社会を考えるには、まず1人の人間をベースに考える事が出来る筈である。1人の人間は、生理と心理と精神の三位一体の重層構造体として出来ている。

生理とは、まさに「水・食料・空気が等物質を体内に取り入れて、新陳代

謝を行い、ホメオスタシスを働かせ、生命活動を維持させたり、成長させたり、老化させたりする基本となる物質的、物理的活動である。

心理とは、「楽しい」、「苦しい」、「面白い」、「つまらない」等々というように主として形容詞で表現される人間の心や意識であり、論理化されていない人間の認識の動きを指す。

精神とは、思想やイデオロギーや様々な人間の思考活動とその結果に生じるものを、少し体系的に構造化し、論理化したものを指す。宇宙観、世界観、死生観、社会観、職業観等々といったものや、「真・善・美」に関わる意識の秩序的、構造的な働きを指す。

今日の地球全体の問題を捉えるに際しても、1人の人間を捉える生理と心理と精神の図式を拡大して用いる事が出来る。もち論、そうしたアナロジーに擬生物主義との批判があつたり、限界のある事は承知の上であるが、本質を損なうようなものではないし、考え得る最良の方法論の1つではないかと考えるのである。

(以下、次号へ続く)